

前書き



虎穴に入らずんば虎児を得ず。少年老い易く学成り難し、一寸の光陰軽んずべからず。百聞は一見に如かず。

中国の古典には、名句があふれています。そんな中から366句を、一日一句の形式（二月二十九日を含む）に並べました。気のきいた表現として、スピーチやSNSへの投稿などの参考にするもよし、お気に入りの名句を座右の銘にするもよし。さらに、テーマ別さくいん、五十音順さくいんを付し、「こんな内容の名句を知りたい」というときの役に立つことを期しました。

日付順に並んでいますがお読みいただく順序は自由です。自分の誕生日、記念日、思い出の日……きつと心に響く名句があるでしょう。一人でも多くの方のお役に立てば幸いです。

なお、本書は『三省堂 中国名言名句辞典 新版』（大島晃編）をもとにしています。中国の名言をもっと知りたくなった方は、『三省堂 中国名言名句辞典 新版』もあわせてご覧ください。

二〇二三年三月 三省堂編修所

一月二十四日

教える・学ぶ

他山の石、以て玉を攻むべし

意味●他国の山の石でも、玉を磨くのに使うことができる。

参考●自国の者だけでなく他国の者も、たとえ身分が低くとも賢人であれば登用すべきであるという治国の策をたとえていう。転じて他人の誤った言行を自らの修養に役立てる意に用いられる。

【出典】『詩経』小雅・鶴鳴

【原文】他山之石，可以攻玉。

一月二十五日

教える・学ぶ

学ぶに暇あらずと謂う者は、暇ありと雖も亦学ぶこと能わず

意味●学問をするのに時間がないと言う者は、たとえ時間があっても学問をすることなどできない。他のことに託けてやるべきことができない者は、真にやる気のある者とはいえないのである。

【出典】『淮南子』説山訓

【原文】謂「学不」暇者，雖「暇亦不」能「学矣」。

一月二十六日

教える・学ぶ

教学相長するなり

意味●教えることと学ぶことがあいまって向上する。

参考●『礼記』に古語として引用されたものがあるが、直接には、「学びて然る後に足らざるを知り、教えて然る後に困しむを知る（『礼記』学記）」によって導かれた結びのことば。

【出典】『礼記』学記

【原文】教学相長也。

一月二十七日

自然・故郷

山中暦日無し、寒尽くれども年を知らず

意味●山中の暮らしには暦もないので、寒気が尽きて春になっても新しい年が何年かを知らない。

【出典】唐 太上隱者詩「答人」

【原文】山中無「暦日」、寒尽不「知」年。

二月一日

生きる指針

良薬は口に苦けれども病に利あり、
忠言は耳に逆らえども行ないに利あり

意味 ● よい薬は苦くて飲みにくいですが、病気によく効くように、諫言や忠告はなかなか素直に聞き入れにくいですが、行ないの助けとなる。

【出典】『説苑』正諫

【原文】良薬苦_レ於口、利_二於病_一、忠言逆_二於耳_一、利_二於行_一。

二月二日

生きる方

好専門を出でず、悪事千里を行く

意味 ● 善行をした評判はなかなか広まらないのに対し、悪い評判はみるみるうちに遠方まで伝わるものである。悪事を戒める諺。

参考 ● 「悪事千里を走る」の形でも用いられる。

【出典】『北夢瑣言』六

【原文】好事不出_レ門、悪事行_二千里_一。

二月三日

ものの見方

朝は三つにして暮れに四つにす。朝は四つにして暮れに三つにす

意味 ● 飼っている猿に、とちの実を朝三つ、夕方四つやろうと言ったら皆怒ったので、朝四つ、夕方に三つやろうと言ったら皆喜んだ。実際は同じなのに、目先の違いにごまかされることのたとえ。口先で巧みに人をだまし、あやつることのたとえ。

「朝三暮四」の典故。

【出典】『莊子』齊物論

【原文】朝三而暮四、朝四而暮三。

二月四日

成長・進歩

大器は晩成し、大音は希声、大象は形無し

意味 ● 大きな器は完成するのが遅く、大きな音はかえってほとんど聞こえず、大きな形はかえってその形を目にとらえることができな

参考 ● 「大器晩成」は転じて、大きな器量の持ち主、偉大な人物は大成するのに時間がかかる、ふつうよりおくれで頭角を現わすたとえとして用いる。

【出典】『老子』四十一章

【原文】大器晩成、大音希声、大象無_レ形。

魚戯れて新荷動き、鳥散じて余花落
つ

意味 ● 魚がたわむれ泳ぐにつれて、まだ小さな蓮の若葉がかすかにふるえ、木の枝にとまっていた鳥がばらばらと飛び立つと、散り残っていた花びらがひらひらと落ちる。「荷」は蓮。

参考 ● 作者の別荘があった東田は、当時の首都建康（現南京）郊外、名勝鍾山の東のふもとの地名という。繊細な観察眼で晩春を描いた句として古来有名である。

【出典】南朝齊、謝朓詩「游東田」

【原文】魚戯新荷動、鳥散余花落。

耳で聞くは目で見るに如かず

意味 ● 何かについて知ろうとするとき、耳でいくら聞くよりも、実際に自分の目で確かめたほうがよい。百聞は一見に如かず。

参考 ● 『説苑』政理には、「耳で之を聞くは、目で之を見るに如かず。目で之を見るは、足で之を踐むに如かず（伝え聞くより自分で直接見たほうがいいし、それより自分の身で実践したほうがさらにいい）」とある。

【出典】『魏書』崔浩伝

【原文】耳聞不如目見。

五十歩を以て百歩を笑う

意味 ● 五十歩逃げた者が、百歩逃げた者を臆病者として笑う。転じて、本質的には変わらないのに人の言動をあざわらうことをいう。また、その愚かさをいう。

参考 ● 「戦場で武器を引きずって逃げ出す者が出た場合、五十歩逃げた者が百歩逃げた者を嘲笑したらどうか」と孟子が梁惠王に問うた故事にちなむ。日本では「五十歩百歩」の形で使われる。

【出典】『孟子』梁惠王・上

【原文】以「五十歩」笑「百歩」。

山に躓かずして、埴に躓く

意味 ● 山にはつまずかず、小さな蟻塚につまずく。山はその大きさゆえに人も用心してつまずくことはないが、蟻塚はその小ささゆえに人もあなどってつまずくのである。

参考 ● 韓非は刑罰を軽くすることを「埴」にたとえる。つまり、刑罰を軽くすれば人はそれをあなどって法を乱すようになるというのである。

【出典】『韓非子』六反

【原文】不「躓」於山、而「躓」於埴。

江東の子弟才俊多し、捲土重来未だ知るべからず

意味 ● (項羽の本拠地である) 長江下流域には、すぐれた若者が多い。恥を忍んでいったん退却し、彼らとともに砂ぼこりを巻き起こすように再起すれば、天下の形勢はどうなっていたかわからない。「捲土重来」は「土を捲きて重ねて来る」と読む。「捲」は砂ぼこりを巻き上げるの意。「けんどもじゅうらい」とも読む。

参考 ● 「烏江」は安徽省にある長江の渡し場。漢の劉邦に攻められ敗走しここに至った楚の項羽は、亭長が用意した船で江東の

地に渡るのを断り、壮絶な最期を遂げた。この故事をふまえ、項羽が亭長の勧めを聞き入れて長江を渡っていたらどうなっていたかわからない、と述べた句。一度負けた者が勢いをもりかえして再挙を図ることを「捲土重来」というのは、これによる。「捲」は「巻」とも書く。

【出典】 晩唐・杜牧詩「題「烏江亭」」

【原文】 江東子弟多才俊、捲土重来未可知。

大功を成さんとする者は、小を成さず

意味 ● 大きな仕事を成し遂げようとする者は、小さなことを成し遂げようとはしないものだ。

参考 ● 「吞舟の魚は、支流に游ばず、鴻鵠は高く飛んで、汚池に集まらず」のエピソードに見られる楊朱のことは。

【出典】 『列子』楊朱

【原文】 成「大功」者、不成「小」。

心専らならんと欲さば、石を鑿るとも穿ちなん

意味 ● そのことだけに専心すれば、かたい石にでも穴をあけることができる。

参考 ● 張鷟が、五嫂・十娘の両仙女に会い、十娘との恋を成就せんがために詩を贈るさまを五嫂が評したことは。願いをかなえるために懸命になれば、必ずや事は成就されることをいう。

【出典】 『遊仙窟』

【原文】 心欲「専」、鑿「石穿」。